付属資料３　整形外科専門研修カリキュラム

## 1.　形成的評価について

評価は日本整形外科学会が作成した web 入力システムを用いて行う。各項目について目標を達成した都度、あるいは担当した単位期間（ローテーション）終了時またはその年度内に優、可、不可の 3 段階で自己評価を記入し、指導医の評価を受ける。評価日は年月日で記入することとし、遡って数年分をまとめて記入することは認められない。

3 段階の基準

優:充分に理解できた，または実践できた。

可:ほぼ理解した、またはほぼ実践できた。

不可:理解できなかった、または実践できていない。

注意事項

１)不可は落第とする。研修期間中毎年、評価をする。不可であっても、その後、可や優へ変われば OK とする。

２)優と評価されれば、その後の再評価は不要とする。

３)不可の場合、流動単位で再研修するが、それでも不可の場合、研修期間を延長して再々研修を追加する。

４)不可の場合、他施設での研修へ変更することも可とする。不可が消失するまで研修終了は認められない。すなわち、行動目標のすべての必修項目について目標を達成していることが必要である。

## 2.　経験症例・経験手技について

Ⅲ診断基本手技、Ⅳ治療基本手技については 4 年間で 5 例以上経験すること。手術手技は 160 例以上を経験すること、そのうち術者としては 80 例以上を経験すること。なお、術者として経験すべき症例については、以下に記載している「A：それぞれについて最低 5 例以上経験すべき疾患。B：それぞれについて最低 1 例以上経験すべき疾患。」の中のものとする。

A：それぞれについて最低 5 例以上経験すべき疾患

B：それぞれについて最低 1 例以上経験すべき疾患。括弧[ ]内の疾患は、どの症例経験でも一経験とカウントする。

C：症例が少ないため、経験修得できなくても正確な知識を持つべき疾患（括弧[ ]内の疾患も含めて）Teaching file、カンファレンス参加、講演受講、e ラーニングなどを利用する。

## 3.　注意事項

Ⅴ運動器疾患に記載されている疾患を履修した際、Ⅵ小児・Ⅶポーツ・Ⅷリハビリテーションの各項目の行動目標の中で、当該疾患に関連する行動目標があれば、同時に修得して評価を受けてよい。

付属資料３　整形外科専門研修カリキュラム

## Ⅰ医師の法的義務と職業倫理

一般目標：医師が守るべき法律と医師に求められる倫理規範を理解し、遵守できる

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 医師法等で定められた医師の義務を知っている | | | |
| 2. | 医療法の概略、特に療養担当規則を理解している | | | |
| 3. | 医療行為に関する上記以外の法律(健康保険法・薬事法など)を十分に理解し、遵守できる | | | |
| 4. | 医療倫理、医療安全の重要性を理解し実践できる | | | |
| 5. | DOH(Declaration of Helsinki)、日本医師会の「医の職業倫理綱領」を知っている | | | |
| 6. | 患者やその家族と良好な信頼関係を確立することができる | | | |

## Ⅱ運動器の基礎知識

一般目標：運動器疾患の理解に必要な運動器の解剖学および病態・生理学を修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 体幹・四肢の解剖を修得する | | | |
| 2. | 次の組織の正常組織像と各種疾患での病理組織像を述べることができる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| (1) | 骨 | | | |
| (2) | 関節 | | | |
| (3) | 脊椎・脊髄 | | | |
| (4) | 神経 | | | |
| (5) | 筋・腱・靱帯 | | | |
| (6) | 血管 | | | |
| 3. | 骨代謝の概略を述べることができる | | | |
| 4. | 骨折の治癒過程を述べることができる | | | |
| 5. | 軟骨代謝の概略を述べることができる | | | |
| 6. | 軟骨修復について述べることができる | | | |
| 7. | 神経の変性と再生について述べることができる | | | |
| 8. | 関節症と関節炎の病態の違いを述べることができる | | | |
| 9. | 運動器のバイオメカニクスの概略を述べることができる | | | |

## Ⅲ診断基本手技

一般目標：運動器疾患の正確な診断を行うための基本的手技を修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 病歴聴取に際して患者の社会的背景や QOL に配慮できる | | | |
| 2. | 主な身体計測(ROM、四肢長、四肢周囲径)ができる | | | |
| 3. | 骨・関節の身体所見がとれ、評価できる | | | |
| 4. | 脊椎の身体所見がとれ、評価できる | | | |
| 5. | 神経学的所見がとれ、評価できる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| (1) | 徒手筋力テスト(MMT) | | | |
| (2) | 感覚障害の検査 | | | |
| (3) | 反射 | | | |
| 6. | 適切な X 線写真の撮影部位と方向を指示し、読影できる | | | |
| 7. | CT の適応を理解し、適切に指示し、読影できる | | | |
| 8. | MRI の適応を理解し、造影の要否も含め適切に指示し、判定できる | | | |
| 9. | シンチグラフィーの適応を理解し、適切な核種を指示し、判定できる | | | |
| 10. | 電気生理学的検査(筋電図など)の適応を理解し、指示、判定できる | | | |
| 11. | 骨量測定の概要を理解し、指示・判定できる | | | |
| 12. | 超音波エコー検査の適応を理解し、実施・判定できる | | | |
| 13. | 侵襲的検査を行う場合、患者・家族に説明し、同意を得ることができる | | | |
| 14. | 侵襲的検査施行後の合併症を熟知し､予防的管理を適切に実施できる | | | |
| 15. | 血液・尿生化学検査の適応を理解し、指示・判定できる | | | |
| 16. | 関節液検査、脳脊髄液検査の適応を理解し、実施・判定できる | | | |
| 17. | 関節造影、脊髄造影の適応を理解し安全に実施できる | | | |
| 18. | 組織生検の適応と手技を理解し、指導責任者のもと実施できる | | | |
| 19. | 微生物学の基礎を理解し、細菌検査を指示・判定できる | | | |
| 20. | 病理標本を検鏡し、正常像と病的組織像の鑑別ができる | | | |
| 21. | 関節鏡検査の適応を理解し、指導責任者のもとで安全に実施できる | | | |
| 22. | 日整会各種機能評価判定基準を用いて評価できる | | | |

## Ⅳ治療基本手技

一般目標：運動器疾患の治療を安全に行うための基本的手技を修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 薬物療法の基本と適応を理解し、適切に処方できる | | | |
| 2. | 医薬品副作用被害救済制度を知っている | | | |
| 3. | 麻薬管理に関する法律を理解し、適切に処方できる | | | |
| 4. | 一般外傷を診断し、検査と治療の優先度を評価できる | | | |
| 5. | 骨折や脱臼の整復を正しく実施できる | | | |
| 6. | ブラッシング、デブリドマンなど基本的創傷処置を正しく実施できる | | | |
| 7. | 局所麻酔を正しく実施できる | | | |
| 8. | 伝達麻酔を正しく実施できる | | | |
| 9. | 腰椎麻酔を正しく実施できる | | | |
| 10. | 硬膜外麻酔を正しく実施できる | | | |
| 11. | 全身麻酔の基礎を理解できる | | | |
| 12. | 固定法(副子、ギプスなど)の基本と適応を理解し、適切に実施できる | | | |
| 13. | 牽引療法の基本と適応を理解し、適切に実施できる | | | |
| 14. | 理学療法の基本と適応を理解し、適切に処方できる | | | |
| 15. | 運動療法の基本と適応を理解し、適切に処方できる | | | |
| 16. | 作業療法の基本と適応を理解し、適切に処方できる | | | |
| 17. | 装具療法の基本と適応を理解し、装具や杖を適切に処方できる | | | |
| 18. | 清潔操作(関節穿刺・注入や直達牽引など)ができる | | | |
| 19. | 神経ブロックを安全に実施できる | | | |
| 20. | 硬膜外ブロックを安全に実施できる | | | |
| 21. | 局所解剖に基づいて手術の概要を述べることができる | | | |
| 22. | 手術について、患者・家族に説明し、同意を得ることができる | | | |
| 23. | 術前の準備(患者と患肢の確認、体位、手洗いなど)を適切に実施できる | | | |
| 24. | 運動器の基本的な手術手技(鏡視下手術を含む)に習熟し、実施できる | | | |
| 25. | 骨移植の種類を理解し、その適応を判断できる | | | |
| 26. | バイオマテリアルの種類を理解し、その使用基準を判断できる | | | |
| 27. | 患者・家族に手術の内容と術後合併症の可能性などを説明できる | | | |
| 28. | 術後合併症を熟知し、予防的管理を適切に実施できる | | | |
| 29. | 手術記録を適切に作成できる | | | |
| 30. | 術後のリハビリテーションを適切に処方できる | | | |
| 31. | 在宅医療・社会復帰などにつき、メディカルスタッフなどと協議できる | | | |

## Ⅴ運動器疾患

一般目標：重要な運動器疾患について理解・修得する

| 行動目標：下記に属する疾患の臨床像を述べて鑑別診断でき、検査・治療方針を立てることができる | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 軟部組織・骨・関節の感染症 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| B1. | 骨髄炎、化膿性関節炎 | | | |
| C2. | 壊死性筋膜炎、ガス壊疽、破傷風、化膿性腱鞘滑膜炎、結核性腱鞘滑膜炎、ネコひっかき病、真菌性関節炎、結核性骨関節炎、非結核性好酸菌症、梅毒、人工関節置換術後感染、脊椎インストゥルメンテーション手術後感染、薬剤耐性菌感染症 | | | |
| 2. | 慢性関節疾患 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A1. | 変形性関節症、痛風 | | | |
| B2. | 偽痛風(CPPD 結晶沈着症)、滑液包炎 | | | |
| C3. | 神経病性関節症、血友病性関節症、血液透析と骨・関節症、アルカプトン尿性関節症、ヘモクロマトーシス、Wilson 病、肺性肥厚性骨関節症、異所性骨化(骨化性筋炎) | | | |
| 3. | 四肢循環障害 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| B1. | 閉塞性動脈硬化症 | | | |
| C2. | 閉塞性血栓血管炎、静脈血栓塞栓症、静脈瘤、Raynaud 現象、区画症候群、Volkmann 拘縮 | | | |
| 4. | 骨系統疾患 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| C1. | FGFR3 異常症[軟骨無形性症、軟骨低形成症、致死性骨異形成症]、II 型コラーゲン異常症[先天性脊椎骨端異形成症、Kniest 骨異形成症、Stickler 症候群 1 型など]、短肋骨異形成症[軟骨外胚葉性異形成症など]、多発性骨端異形成症、偽性軟骨無形成症、骨幹端異形成症[Schmid 型骨幹端異形成症など]、点状軟骨異形成症、骨変形を伴わない骨硬化性疾患[大理石骨病、濃化異骨症]、骨形成不全症、多発性異骨症[ムコ多糖症 IV 型(Morquio 症候群)など]、鎖骨頭蓋異形成症 | | | |
| 5. | 先天異常症候群 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| B1. | 手の先天異常[形成障害、分化障害、重複、指列誘導異常など]、<br>足の先天異常[形成障害、分化障害、重複、趾列誘導異常など] | | | |
| C2. | その他の先天異常症候群[先天性結合組織病、進行性骨化性線維異形成症など] | | | |

| 6. | 代謝性骨疾患 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| A1. | 骨粗鬆症 | | | |
| C2. | くる病、骨軟化症、上皮小体機能異常[原発性上皮小体機能亢進症、続発性上皮小体機能亢進症、三次性上皮小体機能亢進症、特発性上皮小体機能低下症、続発性上皮小体機能低下症、偽性上皮小体機能低下症、偽性偽性上皮小体機能低下症]、甲状腺機能異常[甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症]、成長ホルモン異常[先端巨大症、巨人症、Cushing 症候群]、骨 Paget 病 | | | |
| 7. | 神経疾患、筋疾患 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| C1. | 脳性麻痺、脳血管疾患、運動ニューロン疾患[筋萎縮性側索硬化症、脊髄性進行性筋萎縮症]、変性疾患[Parkinson 病、脊髄小脳変性症]、脱髄疾患[多発性硬化症など]、単神経障害、多発性単神経障害、多発神経障害、筋疾患[多発筋炎、封入体筋炎、進行性筋ジストロフィー] | | | |
| 8. | リウマチ | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A1. | 関節リウマチ | | | |
| C2. | 悪性関節リウマチ、若年性関節リウマチ、成人発症 Still 病、 回帰性リウマチ、リウマチ性多発筋痛症、強直性脊椎炎、反応性関節炎(Reiter 症候群)、乾癬性関節炎 、掌蹠膿疱症性骨関節炎、サルコイドーシス、Jaccoud 関節炎、線維筋痛症 | | | |
| 9. | 腫瘍 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A1. | 良性軟部腫瘍あるいは腫瘍類似疾患[脂肪腫、線維腫、腱鞘巨細胞腫、色素性絨毛結節性滑膜炎、血管腫、神経鞘腫、神経線維腫、弾性線維腫、粘液腫、平滑筋腫、グロームス腫瘍、ガングリオンなど] | | | |
| B2. | 転移性骨腫瘍 | | | |
| C3. | 良性骨腫瘍[骨軟骨腫、内軟骨腫、骨巨細胞腫、類骨骨腫]、骨腫瘍類似疾患[非骨化性線維腫、単発性骨嚢腫、線維性骨異形成症、Langerhans 細胞肉芽腫症、動脈瘤様骨嚢腫、骨線維性異形成、骨内ガングリオン]、原発性悪性骨腫瘍[骨肉腫、軟骨肉腫、悪性線維性組織球腫、Ewing 肉腫(PNET)、悪性リンパ腫、脊索腫、骨髄腫]、良性軟部腫瘍あるいは腫瘍類似疾患[脂肪腫、線維腫、腱鞘巨細胞腫、色素性絨毛結節性滑膜炎、血管腫、神経鞘腫、神経線維腫、弾性線維腫、粘液腫、平滑筋腫、グロームス腫瘍、ガングリオンなど]、軟部の良悪性中間病変[デスモイド型線維腫症、隆起性皮膚繊維肉腫]、悪性軟部腫瘍[線維肉腫、粘液線維肉腫、悪性線維性組織球腫、脂肪肉腫、平滑筋肉腫、横紋筋肉腫、血管肉腫、滑膜肉腫、悪性末梢神経鞘腫、胞巣状軟部肉腫、類上皮肉腫、明細胞肉腫、骨外性 Ewing 肉腫(PNET)、骨外性骨肉腫] | | | |

| 10. | 上肢・手 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| A1. | 腱板断裂、凍結肩(五十肩) | | | |
| B2. | 反復性肩関節脱臼、石灰性腱炎 | | | |
| C3. | 肩関節の先天異常[肩甲骨高位症、鎖骨頭蓋異形成症、先天性鎖骨偽関節など]、動揺性肩関節、上腕二頭筋長頭腱断裂、上腕二頭筋長頭腱炎、スポーツによる肩の障害[インピンジメント症候群、リトルリーガー肩など]、三角筋拘縮症 | | | |
| B4. | 肘内障、上腕骨小頭離断性骨軟骨炎(野球肘外側型)、上腕骨内側上顆骨端核裂離障害(野球肘内側型)、変形性肘関節症、上腕骨外側上顆炎(テニス肘) 、上腕骨内側上顆炎(ゴルフ肘) | | | |
| C5. | 内反肘、外反肘、前骨間神経麻痺、後骨間神経麻痺、肘関節遊離体 | | | |
| A6. | 腱鞘炎、手の変形性関節症 | | | |
| C7. | 橈骨神経麻痺、正中神経麻痺[手根管症候群など]、尺骨神経麻痺[肘部管症候群など]、三角線維軟骨複合体損傷など手関節靱帯損傷 | | | |
| C8. | 手のスポーツ外傷[スキーヤー母指、野球指、ラガージャージ損傷など]、手の拘縮と変形[Volkmann 拘縮、複合性局所疼痛症候群、Dupuytren 拘縮など]、石灰性腱炎、手の骨壊死[Kienböck 病、Preiser 病など]、Guyon 管症候群 | | | |
| 11. | 下肢 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A1. | 変形性股関節症 | | | |
| B2. | 単純性股関節炎、大腿骨頭壊死症 | | | |
| C3. | 発育性股関節形成不全、Perthes 病、大腿骨頭すべり症、化膿性股関節炎、急速破壊型股関節症、石灰沈着性腱炎、弾発股、股関節唇損傷、一過性大腿骨頭萎縮症、大腿骨頭離断性骨軟骨炎、寛骨臼底突出症 | | | |
| A4. | 半月(板)損傷、変形性膝関節症 | | | |
| B5. | Osgood-Schlatter 病、ジャンパー膝(膝蓋腱炎)、前十字靱帯損傷、後十字靱帯損傷、膝蓋骨脱臼 | | | |
| C6. | 小児の膝変形[反張膝、内反膝、外反膝など]、離断性骨軟骨炎、有痛性分裂膝蓋骨、Sinding-Larsen-Johansson 病、ランナー膝(腸脛靭帯炎)、内側側副靱帯損傷、膝蓋軟骨軟化症、滑膜ひだ障害、膝の特発性骨壊死,ステロイド関節症、滑膜骨軟骨腫症 | | | |
| C7. | 過労性脛部痛(シンスプリント)、脛骨疲労骨折、腓腹筋肉離れ(テニスレッグ)、慢性労作性下腿区画症候群 | | | |
| A8. | 扁平足、変形性足関節症、外反母趾、アキレス腱断裂、アキレス腱(周囲)炎 | | | |
| C9. | 小児期足部変形[先天性内反足など]、麻痺足、母趾種子骨障害、外脛骨障害、三角骨障害、絞扼性神経障害[Morton 病、足根管症候群など]、骨端症、外傷性足部障害[腓骨筋腱脱臼、距骨滑車骨軟骨損傷など]、足底腱膜炎 | | | |

| 12. | 脊椎・脊髄 | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| A1. | 頚椎椎間板ヘルニア、頚椎症、骨粗鬆症性椎体骨折、腰椎椎間板ヘルニア、腰痛症、腰部脊柱管狭窄症 | | | |
| B2. | 後縦靱帯骨化症、脊柱側弯症、脊椎分離症[スポーツによる第５腰椎疲労骨折など]、脊椎すべり症、変形性脊椎症 | | | |
| C3. | 斜頚、環椎・後頭骨癒合症、頭蓋底陥入症、脊髄空洞症、環軸関節回旋位固定、リウマチ性脊椎炎、透析性脊椎関節症、二分脊椎、化膿性脊椎炎、結核性脊椎炎、脊椎・脊髄腫瘍 | | | |

## Ⅵ小児

一般目標：小児運動器疾患の診断・治療・予後を理解・修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 小児の各部位について発育段階に応じたＸ線写真の読影ができる | | | |
| 2. | 保護者や家族に配慮して診断、説明、治療ができる | | | |
| 3. | 小児運動器疾患に使用する装具の基本と適応を理解し、適切に処方、適合できる | | | |
| 4. | 被虐待児症候群の診断および行政機関への連絡等の適切な対応ができる | | | |
| 5. | 乳幼児の運動発達遅延の診断ができる | | | |
| 6. | 骨成長障害に対する外科的治療法について、基本的知識を有する | | | |

## Ⅶスポーツ

一般目標：運動器のスポーツ外傷・障害（傷害）について基本的知識を修得し、適切に対処する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | スポーツ医学の概念を理解する | | | |
| 2. | 運動負荷試験と運動処方の基本を理解する | | | |
| 3. | スポーツ外傷について理解し、適切に治療できる | | | |
| 4. | スポーツ障害の種目特性について理解し、適切に治療できる | | | |
| 5. | 発育期のスポーツ障害について理解し、適切に治療・予防ができる | | | |
| 6. | 中・高年のスポーツ障害の特徴を理解し、適切に治療・予防ができる | | | |
| 7. | 女性の身体的特徴と関連したスポーツ障害について理解し、運動の指導・助言ができる | | | |
| 8. | アスレティックリハビリテーションについて理解し、指導することができる | | | |
| 9. | アンチ・ドーピングについて理解し、啓発できる | | | |
| 10. | スポーツ現場での救急医療を理解し、競技大会での救護ができる | | | |
| 11. | ブレースの処方、テーピング処置ができる | | | |
| 12. | 障害者スポーツを理解する | | | |

## Ⅷリハビリテーション

一般目標：運動器の機能障害を正確に評価し、運動器リハビリテーションを適切に処方する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 「リハビリテーション」の概念を理解できる | | | |
| 2. | 国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health, ICF）の概念を用いて医学的リハビリテーションのプログラムを考えることができる | | | |
| 3. | リハビリテーション専門職(PT,OT,ST,MSW など)の職務、専門性、役割について理解できる | | | |
| 4. | 上記専門職、看護師との医療チームの意義、必要性を理解し、医師としての役割を果たすことができる | | | |
| 5. | 高齢者・障害者に対する社会福祉制度について理解できる | | | |
| 6. | 運動器不安定症を診断し、治療できる | | | |
| 7. | 機能評価尺度（Barthel Index、FIM、ロコモ 25、JKOM、RDQ など）を用いて運動機能を評価できる | | | |
| 8. | ロコモティブシンドロームを理解し、病態に適した運動指導ができる | | | |
| 9. | 運動器疾患に対する運動療法の適応と禁忌を理解し、処方し、治療成果を評価できる | | | |
| 10. | 運動器疾患に対する作業療法の適応と禁忌を理解し、処方し、治療成果を評価できる | | | |
| 11. | 運動器疾患に対する義肢装具療法の適応と禁忌を理解し、処方し、治療成果を評価できる | | | |
| 12. | 運動器疾患に対する物理療法の適応と禁忌を理解し、処方し、治療成果を評価できる | | | |

## IX地域医療

一般目標：地域にて医療を行うための必要な知識を修得する

| 行動目標 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 少人数での医療における危機管理能力を修得する | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| (1) | 院内で臨機応変に対応でき、医療安全管理体制を理解している | | | |
| (2) | 病診連携・病病連携について理解している | | | |
| (3) | メディカルスタッフ(看護師、PT、OT、ST、放射線技師、薬剤師など)と協議ができる | | | |
| (4) | 地域医療を支える職種（ケースワーカー、ケアマネージャー、MSW など）についての理解がある | | | |
| 2. | 地域住民とのコミュニケーションについて説明できる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| (1) | 地域住民とコミュニケーションがとれる | | | |
| (2) | 住民健診やボランティア活動に積極的である | | | |
| 3. | 医療保険制度、介護保険制度、公費負担制度について説明できる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| (1) | 医療保険の概略を理解している | | | |
| (2) | 医療保険の種類を理解している | | | |
| (3) | 公費負担医療について理解している | | | |
| (4) | 介護保険制度について理解している | | | |
| (5) | 自分で行っている医療行為の金額を知っている | | | |

## X 流動単位：不足部分の補完として使用

## XI外傷（救急医療）

一般目標：運動器救急疾患・外傷に対応できる基本的診療能力を修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 救急医療に関する法律を理解し遵守できる | | | |
| 2. | 一時救命処置ができる | | | |
| 3. | 多発外傷における重要臓器損傷とその症状を述べることができる | | | |
| 4. | 多発外傷の重症度を評価し、検査・治療の優先度を判断できる | | | |
| 5. | 開放骨折の重症度を判断し、適切な応急処置を実施できる | | | |
| 6. | 骨折･脱臼を列挙して、その臨床像と治療方針を述べることができる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A(1) | 肩関節部の骨折と脱臼 | | | |
| A(2) | 上腕骨骨幹部の骨折 | | | |
| A(3 | 肘関節部の骨折と脱臼 | | | |
| A(4) | 前腕骨骨折 | | | |
| A(5) | 手関節・手部の骨折・脱臼 | | | |
| A(6) | 胸郭の外傷 | | | |
| A(7) | 脊椎の骨折・脱臼 | | | |
| A(8) | 骨盤の骨折 | | | |
| A(9) | 股関節部の骨折・脱臼 | | | |
| A(10) | 大腿骨骨幹部骨折 | | | |
| A(11) | 膝関節部の骨折・脱臼 | | | |
| A(12) | 下腿骨骨折 | | | |
| A(13) | 足関節・足部の骨折・脱臼 | | | |
| 7. | 次の組織の損傷を診断し、適切な応急処置を実施できる | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
| A(1) | 皮膚-擦過創、切創、刺創、挫創、皮膚欠損創、褥瘡など | | | |
| A(2) | 筋・腱-筋断裂、腱断裂など | | | |
| A(3) | 血管-動脈損傷など | | | |
| A(4) | 靱帯-捻挫、亜脱臼、脱臼 | | | |
| A(5) | 末梢神経-腕神経叢損傷など | | | |
| A(6) | 脊椎・脊髄-頚椎捻挫 | | | |
| A(7) | その他の脊椎・脊髄-脊椎損傷、脊髄損傷など | | | |
| 8. | 脊髄損傷と末梢神経損傷の麻痺の高位を判断し、応急処置を実施できる | | | |
| 9. | 手の外傷の特徴を理解し、適切な処置・初期対応を実施できる | | | |
| 10. | 急性期の骨・関節感染症の症状を評価し、適切な処置を実施できる | | | |
| 11. | Basic life support コースを受講する | | | |
| 12. | JATEC(Japan advanced trauma evaluation & care)コースを受講する | | | |

## Ⅻ医療記録

一般目標：医療記録は開示義務に基づき必要事項が正確に記録されねばならないこと、そして医療記録は個人情報であり、社会的にその管理責任を果たさねばならないことを理解・修得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 医療記録は社会的に開示を要求されうるものであることを常に意識して正確に作成できる | | | |
| 2. | 医療記録に対する厳重な管理責任が必要であることを理解し、その方策を立て、実施できる | | | |
| 3. | 運動器疾患について正確に病歴を記載できる<br>記載内容：主訴、現病歴、家族歴、職業歴、スポーツ歴、外傷歴、アレルギー歴、内服歴、治療歴など | | | |
| 4. | 運動器疾患の身体所見を記載できる<br>記載内容：脚長、筋萎縮、変形(脊椎、関節、先天異常)、ROM, MMT, 反射、感覚、歩容、ADL など | | | |
| 5. | 検査結果を記載できる<br>記載内容：画像(X 線像、MRI、CT、シンチグラム、ミエログラム)、血液生化学、尿、関節液、病理組織など | | | |
| 6. | 症状、経過を記載できる | | | |
| 7. | 検査、治療行為に対するインフォームドコンセントの内容を記載できる | | | |
| 8. | 手術記録を適切に作成できる | | | |
| 9. | 紹介状、依頼状を適切に書くことができる | | | |
| 10. | リハビリテーション、義肢、装具の処方と結果を記録できる | | | |
| 11. | 障害認定(労災、身障、交通災害、年金)と診断書の種類と内容が理解でき，適切に記載できる | | | |

## XIII研究・発表能力

一般目標：臨床的な疑問点を見出して解明しようとする意欲を持ち、その解答を科学的に導き出し、論理的に正しくまとめる能力を習得する

| 行動目標 | | 自己評価 | 指導医評価 | 評価日 |
|---|---|---|---|---|
| 1. | 経験症例から研究テーマを立案しプロトコールを作成できる | | | |
| 2. | 研究に参考となる文献を検索し、適切に引用することができる | | | |
| 3. | 結果を科学的かつ論理的にまとめ、口頭ならびに論文として報告できる | | | |
| 4. | 研究・発表媒体には個人情報を含めないように留意できる | | | |
| 5. | 研究・発表に用いた個人情報を厳重に管理できる | | | |
| 6. | 統計学的検定手法を選択し、解析できる | | | |